

巻 頭 言

東日本大震災を経験して飛躍・前進する学部，大学院の教育・研究活動

社会安全学部と大学院社会安全研究科修士課程が創設され，およそ11か月経過し，ほぼ1年間でどのようなことをやるのかを経験した時点で，東日本大震災が発生した。3月11日は，学部入試の後期日程も終わっており，後は新年度を迎える準備に入る矢先の大災害であった。

私自身は，当日，神戸市にある兵庫県公館で近畿地方を中心とした自治体の防災関係者約250名の参加を得て，「東南海・南海地震対策に関するシンポジウム」を朝10時から開催していた。そして，午後のセッションに入り，特別講演が終わり，分野別発表の最中に，地震が発生した。初めは壁に沿ってスクリーンが左右にゆっくりとした周期で揺れ始め，同時に天井のシャンデリアも音を立てて揺れだしたので，すぐにどこか遠くでプレート境界地震が起こったと判断した。直ちにシンポジウムを中断し，私はすぐに阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センターに向かった。

センターではテレビに映し出された津波の挙動に息をのむばかりであった。なぜ，起こったのが東海・東南海・南海地震ではなくて東北地方太平洋沖地震なのか，理解に苦しむ出来事であった。「このようなことは起こって欲しくない」と考えていたので，固唾を飲むばかりであった。そして，地震の揺れが震度6弱以上あることから，先遣隊を12日に送り込む段取りをした。夕方には松本 龍防災担当大臣から電話が入り，当面やらなければいけないことを指摘していただきたいという依頼であった。それは，翌朝にもかかってきた。このような素早い活動が開始されたのは，人と防災未来センターの設立趣旨に則った行動を実行したからである。そして，社会安全研究科や社会安全学部のような大学の組織は，学術研究・教育機関であるから，素早い対応というよりは，組織的かつ継続的な取り組みをやればよいということは当初からわかっていた。あわててはいけないのである。むしろ，メディアを通して，暗黙知や形式知を被災者を中心に政府・自治体の関係者に届けなければならないのである。したがって，本学部の教員はそれぞれの研究のバックグラウンドを活用して，共同研究や調査の形で被災地に入るようになった。それらの成果を用いて，3月30日に緊急シンポジウムを高槻ミュージズホールで開催することができたのである。このシンポジウムは，1学部の教員だけで実施した総合シンポジウムとして，わが国で最初のものとして位置づけられた。当日は来場者が会場内に入りきらず，また多くのメディア取材も入って，災害情報が高槻ミュージズキャンパスから発信しているという実感をもつことができた。

その後は，私自身が政府の復興構想会議委員や中央防災会議の「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波の教訓に関する専門調査会」の座長に就任した結果，復旧・復興事業の展開内容と進捗状況が本学部の教員や関係者にすばやく共有できることになった。そして，そのことが本学部教員に

よる研究調査活動を一層活発化することに寄与することになった。そればかりではない。夏休みには60人を超える大学院学生や学部学生が本学部の企画した被災地のボランティア活動に参画し、それ以後も教員主導のボランティア活動が継続するなど、実践的な教育活動へとつながっている。この震災を経験して本学部の教員も学生も一段と飛躍できたことは間違いなく、組織的な対応が見事に成就したといえよう。それらの研究成果の一部は本書にも紹介されており、塩谷尚正・土田昭司・辻川典文「内集団実体性認知がリスク施設への態度に与える影響」、金子信也「Kan-Dai 1 セミナーの効果「被災者のメンタルヘルス」の場合」、古林智宏「巨大災害に備えた食料及び飲料水の新たな備蓄手法の研究——長期保存食料及び飲料水の全国民への事前配給について——」、そして永田尚三・奥見文・坂本真理・佐々木健人・寅屋敷哲也・根来方子「地方公共団体の防災・危機管理体制の標準化についての研究」の4本の論文が寄稿された。さらに、2012年2月にはミネルヴァ書房から「検証 東日本大震災」を上梓し、17名の本学部教員が執筆した。東日本大震災後、1学部の教員でこのような300ページを超える総合的な内容の専門書を刊行できたこともわが国では初めてであり、そのことはわたくしたちの誇りとなるものである。

また、2012年度から大学院博士課程後期課程も設置されることになり、その準備も着々と進んでいる。2月には修士課程の修士論文の発表会と審査会も開催され、13名の修士課程2年次生がこれに臨んでいる。このように学年進行形ではなく、5年間で学部・大学院教育の全体が完成する計画が着実に進行していると判断しており、一層の努力を関係各位にお願いしたい。

2012年2月

関西大学理事
社会安全学部長・社会安全研究科長
教授（工学博士）
河 田 惠 昭